

最終戦は



体を張ってボールを奪い合う徳島。詰めかけたサポーターから大歓

「四国アイランドリーグ」に注目している。「野球をやりたいと思ってる人たちのチャンスを広げる試み。能力を高めて、ぜひセ・パ両リーグにきてほしい」

（保田達哉）

「勝つことの大事さ」を改め

「やはり巨人を破り、甲子園で胴上げしたことが本場にうれしかった」。「代打の神様」と言われた元阪神タイガースの八木裕さん（40）写真Ⅱが、徳島市で開かれた「徳島猛虎会20周年記念パーティー」に招かれ、今シーズンの阪神の戦いを振り返った。

昨年に阪神を引退し、現在は野球解説者。今シーズン前には鳥谷敬選手の打率を2割7分8厘と予想し、びたりと当てた。解説者になって実感したのが、ファンの熱い思いだ。解説者としてスタンドで聞く「六甲おろし」に圧倒され、「勝つことの大事さ」を改め

「徳島でもこれだけ多くのファンが応援してくれている。今までは優勝で大騒ぎしていたが、やはり来季は日本一になってほしい」と話した。

今春発足した野球の独立リーグ

「四国アイランドリーグ」に注目している。「野球をやりたいと思ってる人たちのチャンスを広げる試み。能力を高めて、ぜひセ・パ両リーグにきてほしい」

（保田達哉）

後半は水戸ベース。徳島は中盤でのパス回しに力に欠け、ゴールを奪えない。逆に同28分、水戸にCKから先制された。

午後4時ごろからは、ピッチでシーズン終了を祝うセレモニーが開かれ、サポーターが選ぶ「今季最も印象に残った

同も左サイドを得意のドリブルで駆け上がるが決定力に欠け、ゴールを奪えない。逆に同28分、水戸にCKから先制された。

7本。試合後、田中監督は「もっとがむしゃらに、泥臭くてもいいので攻めてほしい」と悔やんだ。

「代打の神様」Iリーグ注目

「やはり巨人を破り、甲子園で胴上げしたことが本場にうれしかった」。「代打の神様」と言われた元阪神タイガースの八木裕さん（40）写真Ⅱが、徳島市で開かれた「徳島猛虎会20周年記念パーティー」に招かれ、今シーズンの阪神の戦いを振り返った。

昨年に阪神を引退し、現在は野球解説者。今シーズン前には鳥谷敬選手の打率を2割7分8厘と予想し、びたりと当てた。解説者になって実感したのが、ファンの熱い思いだ。解説者としてスタンドで聞く「六甲おろし」に圧倒され、「勝つことの大事さ」を改め

ひと模様



「農業の甲子園」2年生で優秀賞

三好高校の崎川龍也さん（17）＝写真＝が、岐阜県内で開かれた「農業の甲子園」、日本学校農業クラブ全国大会の農業鑑定競技・林業部門で2年生ながら優秀賞を獲得した。

植物や農機具、肥料など林業に関するものの実物や写真をみて、種類などをいかに正確に答えられるかを競う。林業に関する計算問題も2問含まれ、計40問。崎川さんは「じっくりていねいに、誤字や脱字にも気をつけ、32問はできた」。

当初は競技ではなく意見発表の部を目指した。テーマは「夢は祖父を超えること」。小さなころから池田町の母の実家で、林業の祖父について回った。中学まで兵庫県加古川市で過ごし、進路を林業に決めたが近くに林業科はなかった。転勤族の父親と離れ、母と兄弟3人が引っ越してきた。

意見発表では四国大会で阻まれ、急きょ出場した鑑定競技で結果を残せた。「ある程度、祖父に近づけたかも。でも実際に山での動きはまだまだ。祖父に追いつけるよう、体を鍛えています」（竹中千広）



「徳島でもこれだけ多くのファンが応援してくれている。今までは優勝で大騒ぎしていたが、やはり来季は日本一になってほしい」と話した。

今春発足した野球の独立リーグ

「四国アイランドリーグ」に注目している。「野球をやりたいと思ってる人たちのチャンスを広げる試み。能力を高めて、ぜひセ・パ両リーグにきてほしい」

（保田達哉）

日本拳法 安全に鍛錬



防具を着用して突きやけり、関節技などを繰り返す日本拳法。徳島大学日本拳法部のOB会長山下佑治さん（58）写真、徳島市川内町Ⅱは、より安全に技を磨いてもらおうと、従来の防具を改良した「徳大式防具」を開発した。「こぶしを痛めなくなった」と現役の部員たちにも好評だ。

競技歴は約40年。かつて4年連続で全国大会に出場した実力者。現在も週3回は部員と拳を合わせこぶしを骨折する部員が増えたの

が気になっていた。「年を取り自分もけがをした。こぶしを鍛えるより、防具の性能を高めるべきだ」と考えた。

そこで、インターネットで衝撃吸収に優れた素材を調べ、日本拳法部の特性に合う低反発クッション材を見つけた。グローブと防具面の内側に詰めるとして試作を重ねた。9月からは部員たちにも練習で着用してもらい、改良効果を確かめたという。「日本拳法の安全に役買えたらいいですね」

（志村英司）

成づくり

師走を迎え、鳴門市大麻町の大谷焼の各窯元では来年の干支「戌」の置物づくりが最盛期を迎えた。

矢野陶苑でも陶芸家の矢野敦一さん（63）が工房で粘土の型抜きをし、細かい仕上げの作業をしているⅡ写真。乾燥させて素焼きのあと、釉をかけて再び窯へ。焼き上がりは12月中旬になる。

今年は、握りこぶし大から手のひら大までの10種類に仕上げの作業をしているⅡ写真。乾燥させて素焼きのあと、釉をかけて再び窯へ。焼き上がりは12月中旬になる。

今年、握りこぶし大から手のひら大までの10種類に仕上げの作業をしているⅡ写真。乾燥させて素焼きのあと、釉をかけて再び窯へ。焼き上がりは12月中旬になる。